

令和7年度 岐阜県農政審議会（第1回） 開催結果

1 日 時：令和7年9月10日（水） 10：30～12：00

2 場 所：県議会棟3階 大会議室

3 出欠状況

（出席者 以下16名）

布俣 正也	（岐阜県議会農林委員会 委員長）
山内 登	（岐阜県市長会（下呂市長））
西脇 康世	（岐阜県町村会（関ヶ原町長） 副会長）
岩井 豊太郎	（一般社団法人岐阜県農業会議 会長） （岐阜県農業共済組合 組合長理事）
櫻井 宏	（岐阜県農業協同組合中央会 代表理事会長）
西村 寿文	（全国農業協同組合連合会岐阜県本部 県本部長）
尾藤 義昭	（岐阜県漁業協同組合連合会 代表理事会長）
藤原 勉	（岐阜県土地改良事業団体連合会 会長）
春見 秀則	（岐阜県指導農業士連絡協議会 会長）
仙石 弘美	（岐阜県JA女性連絡協議会 会長）
和田 明美	（岐阜県女性農業経営アドバイザー いきいきネットワーク 会長）
山田 邦夫	（岐阜大学 教授）
神谷 眞弓子	（東海学院大学 学長）
道家 晶子	（岐阜市立女子短期大学 教授）
長屋 紀美江	（公益社団法人岐阜県栄養士会 会長）
竹中 昌子	（一般財団法人岐阜県地域女性団体協議会 会長）

（欠席者 以下4名）

村下 貴夫	（一般社団法人岐阜県畜産協会 会長）
川村 雄祐	（岐阜県青年農業士連絡協議会 会長）
高田 禮子	（ぎふ農業委員会女性ネットワーク 会長）
堀部 智子	（生活協同組合コープぎふ 副理事長）

（事務局：岐阜県農政部 以下27名）

農政部	部長、次長（技術）
農政課	課長、技術総括監、スマート農業推進室長、農業研究企画監、 笠松競馬支援室長、管理監
検査監督課	課長
農産物流通課	課長、販売戦略企画監
農業経営課	課長、担い手対策室長
農産園芸課	課長、花き・農業環境対策監
畜産振興課	課長、食肉流通対策室長、飛騨牛銘柄推進室長
家畜防疫対策課	課長、野生いのしし対策室長
農村振興課	課長、鳥獣害対策室長
里川・水産振興課	課長、水産振興企画監、コクチバス対策室長
農地整備課	課長、農地防災対策室長

4 内 容：新たな農政の基本計画（仮）の骨子案について

5 議事要旨：別紙のとおり

令和7年度第1回岐阜県農政審議会議事要旨

1 開会

2 農政部長挨拶

【堀農政部長】

- ・委員の皆様には、お忙しい中出席いただき、厚く御礼申し上げます。
- ・本日は県農政の新たな計画の骨子案についてご審議をいただく。
- ・今年3月の農政審議会では整理した「計画策定の基本的な考え方」をもとに、企画部会を実施し、検討を進めてきたところ。第1回では「多様な方が参画する農業」をテーマに、第2回では今回の計画の最も重要なテーマである「食料自給率の向上」と、「中山間地域における農業の今後の展開」について、第3回では「気候変動対策」、「持続可能な農業」、「鳥獣害対策」を、第4回では「魅力ある農畜水産物づくり」や「新たな販売ルートの確保」をテーマに検討いただき、計画骨子案としてとりまとめたところ。
- ・今回の計画は、これまでの農政の“あたりまえ”を見直し、従来とは異なる切り口で取組を進めていくという観点では、極めて重要な計画であると考えている。委員の皆様には、これまでのご経験や知見をもとに、忌憚のないご意見をいただきたい。

3 会長あいさつ

【山田会長】

- ・県農政は大きな転換期を迎えている。
- ・食料自給率を上げるために、大規模化に加えて、担い手をいかに集めるかというところが重要になってくると考えている。
- ・本審議会において、活発なご議論をお願いする。

4 議事署名者の選定

【山田会長】

- ・議事録署名者に、櫻井 宏委員と神谷 眞弓子委員を指名。

5 新たな農政の基本計画（仮）の骨子案について

【佐藤農政課長】

- ・資料2に基づき、「新たな農政の基本計画（仮）骨子案」について説明。

【山田会長】

- ・事務局の説明に関し、委員の皆様方から意見、質問等をお願いしたい。

【布俣委員】

- ・資料 1 の 5 ページ、社会情勢の変化等のうち「自然災害のリスク」に関して、年々高温が続き、農作物を非常に作りにくくなっている現状の中で、今後もリスクが大きくなることを懸念している。
- ・高温を逆手に取った新たなチャンスについて、具体的にどのような構想を持ってリスク対策として掲げているのか。

【田村農産園芸課長】

- ・米の場合は、水稻の二期作（1 度収穫が終わった後、再度、追肥等をしながらもう 1 度収穫する）により、収量を 1.5 倍程度増加できないか試験しているところ。
- ・品種に関しては、高温耐性の「清流のめぐみ」について、県の奨励品種を目指して動いている。

【伊藤里川・水産振興課長】

- ・温暖化により春の訪れが早まっており、これを利用して鮎の放流時期を早めることで放流鮎の成長を促したり、漁期を早めたりと、魅力的な漁場づくりを考えている。

【布俣委員】

- ・アグリパーク構想について、先ほど説明があった通り、なかなか認識が行き届いてない。県の示すアグリパークと生産者・県民が思っているアグリパークが全然違うように感じている。
- ・実際、今後どのように展開していくのか具体的に説明してほしい。

【佐藤農政課長】

- ・基本方針 1 のところで、新たな担い手の確保、いわば新たなスタートアップの場という位置付けで考えているところ。参考資料 2 にあるように、重点推進モデルとして、3 つほどモデルを掲げ、構築を進めていきたいと考えている。
- ・アグリパークという名称により、ガーデンの延長線とか、公園ではないかとか、そういったようなイメージがどうしても先行している。
- ・まずイメージをわかっていただけるよう、まずはできるだけ早くアグリパークのモデルを示していきたい。

【山田会長】

- ・アグリパークは、モデル的なものをいかに早く作り、広く周知することがスタートとして重要。

【春見委員】

- ・今回の政策の中で、ほ場の大規模化、集約化やスマート農業など、どちらかというところ、平坦地で活用しやすい政策が多いように思うが、中山間の生産性を上げる政策は何か。

【佐藤農政課長】

- ・中山間地域は条件不利だということは、承知している。中山間地の中でも可能なところには、基本方針の2の1にあるような生産拡大に取り組んでいただけるよう進めていきたい。
- ・スマート農業について、現在は、平坦地、大規模な区画向けの技術が先行しているが、中山間地に多く見られるような、小区画農地においても使えるような技術の導入もきちんと図り、中山間地域の農業を支えていきたいと考えている。

【春見委員】

- ・どうしても平場と中山間では生産コストで大きな差が出てきてしまう。平場以外のところにも、支援を検討いただきたい。
- ・今、農大生が学校で学んだ後、就農が難しいという実情があるので、学生達を引き上げるような政策をご検討いただきたい。

【山田会長】

- ・参考資料2の別紙1について、アグリパーク構想と、従来からの就農ルートの充実をどう棲み分けるのかが、はっきりしないところもあると思う。そのあたりはしっかり整理することで、よりアグリパークとはこういうものだというのが際立つと思う。

【西村委員】

- ・食料自給率を2%ずつ上げていくことについて、例えばどの品目でどれぐらい生産を増やせば、食料自給率が2%向上するという根拠を今後計画の中で示せるのかどうか。
- ・米の増産について、輸出も積極的にやっていくということだが、かつて輸出のプロジェクトをやっている中で、1俵あたり1万円を割り込むような価格での輸出ということがされていた。今はコストも上昇しており、2万円を下回るようなお米の生産は難しいと思っているが、その価格差をどうやって埋めようと考えているのか。
- ・担い手の方と話していると、人手不足の声を聴く。これだけ人口減少と人手不足という中では、外国人材の活用も考えていく必要があると思うが、基本計画の中でうたう

ことはあるのか。

【佐藤農政課長】

- ・食料自給率2%をどうやって上げていくのかについては、人と、農地と技術といったものを組み合わせて、しっかり検討していく。
- ・当面は、県内で消費される米の量すべてを賄えるほど生産ができていないという状況を克服すべく、非主食用米をうまく主食用に回す等、まずは米を中心に取り組んでいきたい。

【西村委員】

- ・できれば、米で言えば、何トン何ヘクタール増やせば、その2%に相当するというのを示していただけると、皆さんがイメージしやすいと思う。

【後藤農産物流通課長】

- ・米の輸出に関して、今、国内で米が不足しているタイミングではあるが、将来、人口減少で国内マーケットが縮小していくことを見据え、国内に限らず海外もしっかり捉えていくことが大事。
- ・米の増産にシフトしていく中で、国内マーケットでさばけなくなった場合は、海外マーケットも想定する必要があるため、海外の動向を調査しながら、米の輸出に意欲ある方について情報収集する等、事前に準備していく。

【西村委員】

- ・経済行為として成り立つかどうかということも十分考慮しながら、輸出という言葉を出すべきと思っているので、その点についてもよろしくお願いします。

【長谷川農業経営課長】

- ・外国人材の活用に関して、今すでに県の方で様々な支援を行っている。これについてしっかりと継続していきたい。具体的な今の支援としては、受入れ時に係る研修のための費用や、宿舍の改修費用を支援しており、骨子案には記載がないが、計画の中にはしっかりと盛り込みたい。

【神谷委員】

- ・参考資料2の別紙2、①生産拡大の、「農地の利用拡大」の省力化・省人化に繋がる生産方式への転換について、農業生産に労働人口が追い付かない時代がやがて来ると思う。
- ・その対応として、先ほどの外国人材の活用のほかに、もう一つ、大規模なロボット化

- や無人化が不可欠であると思うが、そのあたりどのような計画をたてておられるのか。
- ・生産拡大の米以外の品目のところで、世界的な気候変動、異常気象により、農産物、特に飼料などはこれからも高騰していくと思われ、牛肉や豚肉等、非常に生産コストがかかるものは、今後採算が合わなくなる不安がある。今までにない価値がある農産物、効率的に生産ができ、かつ栄養価が高い農産物の研究開発など、今後検討しては。
 - ・参考資料2（別紙2）①生産拡大の畜産物の欄で、未利用資源の利用拡大とあるが、これはどういうことを想定しているのか。

【稲川スマート農業推進室長】

- ・無人化に関する生産方式への転換について、近年ロボット機械化が進んできている。
- ・県内への導入はまだ進んでいないが、次期計画では、無人で動くロボット農業機械を含め、全体を通した生産方式を変えていくモデル的な取組の実証、情報発信を進めてまいりたい。

【大下畜産振興課長】

- ・未利用資源について、今具体的に進めているのは酒粕。もともと一部飼料として利用されていたが、産業廃棄物として捨てられているものもかなりあることから、畜産農家とのマッチングを始めているところ。

【山田会長】

- ・これから労働人口が減っていく中で、いかに農業を回していくかというところで、本当にトータルで省人化につながる技術とする必要がある。どういう技術を用いれば農業生産全体が省人化につながっていくのかを、コスト面も含め、しっかり検討しなければならないと思う。

【道家委員】

- ・生産拡大ということは大変、希望が持てる話。一方で、やむを得ず捨てられているような、規格外の野菜や、小ロットでうまく利用されないものの活用を考えているか。

【後藤農産物流通課長】

- ・規格外農産物については、農業者の所得向上のための6次産業化ということで、今も支援しているところ。
- ・フードバンク等へ規格外になったものをつなぐような取組も進めており、今年度から、学校給食と規格外品を繋ぐ挑戦的な取組も進めている。今後、そういった取組をしっかり広げていきたい。

【岩井委員】

- ・基本計画の基本方針２の１の大区画化について、国の政策でいう規模拡大とリンクしているのか。

【和田農地整備課長】

- ・国の大区画化というのは１ヘクタール以上を指すため、国の補助事業についてはこれが条件となる。
- ・一方で、区画拡大という表現になるかと思うが、区画を今よりも大きくして、効率を良くするという別の事業構成もあるので、活用し、区画の拡大を進めていきたい。

【岩井委員】

- ・大区画化について、県の対応をしっかりと示していただきたい。土地改良を行ってから年月が経っており、用排水路について水漏れしているものが多く、排水路の補修と一体で、水田を使いやすくする圃場整備も必要。その際に規模が条件になると思う。国の考え方と、県の考え方とをリンクさせて、大体の目安を示していただきたい。
- ・有機農業について、新しく有機や、無農薬といった農産物を作ろうという意欲のある方もたくさんいるが、そのあたりに関して、県ではどのように取り組んでいく予定か。

【田村農産園芸課長】

- ・有機栽培や無農薬栽培、無化学肥料など、様々があるが、それを大きく括った、岐阜県版の環境保全に取り組む農業を現在考えている。
- ・国では、みどり認定という、減化学肥料等の取組を認める制度があり、それに倣った形での、岐阜県版の大きな範囲のみどり認定のような仕組みを作ろうと考えている。

【岩井委員】

- ・今まで、取り組んできたGAPの取組と、どのように絡めていく予定か。

【田村農産園芸課長】

- ・GAPが体現する安全、安心な農業環境、作業という部分の精神は非常に大事なこと。国のみどり認定では、単に減化学肥料、減化学農薬のみだが、今検討している岐阜県版の制度は、作業環境や動線といったGAPの考え方も認定の中に組み込んで作ろうと構想しているところ。

【岩井委員】

- ・今までぎふ清流GAP制度に取り組んできたが、今後の生かし方は。
- ・最近、一時ほど、GAPの取組を聞かない。GAPに対する取組がちょっと薄らいでいると感じているので、しっかり取り組んでいただきたいと思います。

【田村農産園芸課長】

- ・GAPについては、生産者に加えて、それを取り扱う店舗等関係者も十分理解した上で広めていく必要がある。その辺りも含めて、研究、勉強会を行い、啓発していく。

【山田会長】

- ・消費者からきちんとわかりやすいような表示の制度の仕組みが必要だと思うので、検討いただきたい。

【和田委員】

- ・飛騨牛のブランドの更なる発展について、参考資料2の別紙2に、生産頭数の増を挙げられているが、もともと、岐阜県が作り出してきた飛騨牛ブランドが、薄れてきている状況の中で、これを具体的にどういった形で進められるのか。
- ・市場で、宮崎県の牛農家が岐阜県の繁殖農家の牛を買っていく傾向があると聞いたが、このような状況では、ブランドを強化して、市場を世界まで持って行く取組に繋がらないのでは。

【桑畑飛騨牛銘柄室長】

- ・どうやって増やしていくかについて、まずはその前に、岐阜県で繁殖農家が生産する子牛が高く評価される環境を作り必要があると考えている。そのために、優れた子牛が県内でたくさん生産できるようにする必要がある
- ・現状、県内産の子牛と県外から導入した子牛で、特徴形質を見ると県内産が優れていることがわかっているが、よりよくするために、特徴形質にこだわった岐阜県の種雄牛造成を進めている。特徴形質に優れた精液を使用して、子牛を生産していただき、それが肥育農家・肉屋の評価を受けて、高く県内の市場で子牛が取引される、そういうことをまず実現することが大事。
- ・特徴形質がしっかり評価を受けられれば、県外に子牛が出ていくことが減り、子牛の相場にも好影響を与えていると考えている。
- ・繁殖農家の高齢化が進む中で、次期計画にあるように、居抜き型の担い手の確保ということもしっかり進めながら、生産の基盤の維持をしっかりやっていきたい。

【山田会長】

- ・担い手の確保について、具体的にどういう策があるのか？

【桑畑飛騨牛銘柄室長】

- ・飛騨牛の生産農家の担い手については、現状、岐阜大学、全農岐阜、県の3者連携による飛騨牛繁殖研修事業により、ここまで5名の方、そして今、6名目の方が就農しようという段階。
- ・この他に、アグチャレを通じて県外などからも紹介が入る中で、地域の居抜き型の紹介をこれまでもしており、実際に就農された方もある。今後も、県外も含めた就農フェアなどで、そういう意欲ある方をしっかりと心をつかんで、本県の畜産農家、肉用牛農家になっていただくような努力は継続してまいりたい。

【尾藤委員】

- ・魅力ある農業にするにはどうしたらいいか、これは本当に永遠のテーマだと思う。農業を魅力ある職業にしていくためには見合う収入が必要だが、これにより、米が高くなって、県民が米も肉も買えないようになってしまっただけではいけない。そここのバランスを、今後どうしていけばよいのかを考えていく必要がある。
- ・私も農業は楽しいという中の一人で、土地を借りて農業を始めたが、サルの被害を受けた。政策オリンピック等によりサル対策が進められているが、地元では、「完全に人間はサルに負けた。サルの知恵についていけない」という声を聞き、もっと真剣に取り組まないといけないと思ったところ。
- ・行政が中心となり、農業生産者が、心底、農業に携わりたいと言って生活ができるような、岐阜県農業ここにありという計画にしていきたい。

【西脇委員】

- ・サルだけではなく、シカ対策も重要。獣害により意欲がなくなってしまうことが、農業者にとっては非常に辛いことなので、農業の意欲が持てるような支援が必要。
- ・さらに、今、大きく町内で問題になっているのが、太陽光発電の進出が非常に多いということ。関ヶ原町ではメガソーラーを阻止する条例を作ったが、その結果、50キロワット以下の発電についての問い合わせが増え、阻止のしようがない状況。
- ・農地に虫食い状態で太陽光パネルが出来てしまい、農業がやりにくいという、生産に不利な状況にならないよう、基本方針の中の農地のあっせんなど、農業を続けたいという人に農地を優先的に提供できるような体制を作っていただきたい。
- ・加えて、中山間地地域は特に農業をやるのに非常に厳しい状況で、畔の草刈等の仕事に対する支援策についても検討いただきたい。

【櫻井委員】

- ・今後、計画策定にあたり、当然のように定量の数字が出てくるはずだが、例えば食料自給率について、2%は相当ハードルが高い。一番大事なゴールを達成可能なものにしないと、結局、現実的ではない。
- ・努力すれば達成できるものにしないと、絵に描いた餅で良くないと思う。ただし、一定程度挑戦的なものでないとまた計画にならない。その辺のバランスは考えていただき、次回審議会で見せていただきたい。

【藤原委員】

- ・食料自給率の向上にあたり、課題となるのが基盤。岩井委員から話のあった、用水の補修について、全県下同じ状況であり、やはり米と野菜を作るにあたって、農業基盤がなければ、2%上げていくという食料生産の目標は絵に描いた餅だと思う。そのため係の経費の支援は考えていかなければならないと思う。
- ・もう1つの課題は中山間地域の耕作放棄地がどんどん増えていること。田畑の面積が小さくなかなか機械化もできず、従事者も高齢化しており、さらに獣害が問題。平場での食料生産でいいというものではなく、中山間地域に住む、生活していくために、農業ができるようなしっかりとした基盤にしていく必要がある。

【和田委員】

- ・農家側としては、担い手育成に関しても協力している。その中で、就農意欲のある子どもたちが、どのような形で就農を希望しているか、受け入れ農家側に伝わってきていないと感じる。例えば、農業大学校の生徒が、直接農家に就職したいという場合は、就職できるように農家側も努力したい。
- ・農家には農業技術はあるが、それ以外の労務管理等の分野が負担である場合がある。農家側にどんな要望があるか、他分野の業種とのマッチングについても支援が必要。

【仙石委員】

- ・消費者側からの意見になるが、作り手の努力、価値がわかる地消地産のファンづくりに向けて、手に取る側のために「見える化」の強化をお願いしたい。
- ・外国人の雇用に関して、問題としてあるのは、言葉の問題や、食の問題、そしてメンタル。日本に来て心を病んでしまうとか、様々な問題点があると聞いているので、その辺りも調べていただきたい。

【山田会長】

- ・意見も尽きたため、本日の審議を終了する。

- ・委員の皆様においては、長時間にわたる審議、並びに議事の円滑な進行にご協力いただき感謝する。

6 農政部長あいさつ

【堀農政部長】

- ・委員の皆様においては、長時間にわたる審議に加え、大変示唆に富んだご意見を多数頂戴し、感謝する。
- ・本日いただいたご意見等を踏まえ、計画素案づくりに取り組んでまいりたい。
- ・今後のスケジュールとして、11月に開催予定の第5回企画部会で検討し、素案としてとりまとめ、その後、県議会での説明、パブリックコメントを経て、来年の1月頃に開催の農政審議会において、計画案についてご審議いただき、山田会長から県へ答申いただく。委員の皆さま方におかれましては、引き続きお力添えいただきたい。

7 閉会